

紫式部と『源氏物語』

同志社大学文学部 植木朝子

【紫式部年譜】

- ・藤原為時（漢学者）の娘として、天延元年（九七三）ごろ誕生（生年には、天元元年（九七八）、天禄元年（九七〇）など諸説あり）。
- ・長徳二年（九九六）夏、父とともに越前に下る。
- ・長徳三年（九九七）冬、父と別れ、帰京。
- ・長徳四年（九九八）冬頃、藤原宣孝と結婚。賢子（後の後冷泉天皇乳母・大式三位）誕生。

・長保三年（一〇〇一）四月、宣孝没。

・寛弘二年（一〇〇五）または三年、中宮彰子のもとに出仕。

・寛弘五年（一〇〇八）十一月一日、敦成（あつひら）親王（彰子所生、一条天皇の第二皇子。後の後一条天皇）五十日の祝。

藤原公任「このわたりに、わかむらさきやさぶらふ」（『紫式部日記』）

↓寛弘五年には「若紫巻」はすでに書かれており、公任はそれを読んでいた。

|| 男性貴族にも読者がおり、価値を認められていた。二〇〇八年||源氏千年紀

・長和二年（一〇一三）五月に生存の記録あり（『小右記』）

・長和三年（一〇一四）六月以前に没か？

父・為時が寛弘八年（一〇一一）に越後守となる。一緒に下った弟・惟則（のぶのり）が同年十月に越後で没する。長和三年六月、為時は任期を終えずに帰京。二人の子に先立たれた悲しみのためか？

【紫式部日記より】

寛弘五年五月末頃 道長とのやりとり

※道長から、恋物語の作者として、からかいの和歌を詠みかけられる。

源氏の物語、御前にあるを、殿のご覧じて、例のすずる言ども出できたるついでに、梅の下に敷かれたる紙に書かせたまへる

すきものと名にし立てれば見る人のをらで過ぐるはあらじと思ふ

（浮気者という評判が立っているので、そなたを見る人で口説かずにすます人はあるまいな。すきもの||好き者・酔き物の掛詞/すきもの・をる||梅の縁語）

たまはせされたれば、

人にまだをられるものを誰かこのすきものぞとは口ならしけむ

（人にまだ口説かれたこともありませんが、誰が浮気者だなんて評判をたてたのでしょうか。）

めざましう、と聞こゆ。

寛弘五年六月ごろ 道長の訪問

※夜の訪問者に戸を開けなかったところ、翌日、和歌によって道長とわかる。

渡殿に寝たる夜、戸をたたく人ありと聞けど、おそろしさに、音もせて明かしたるつとめて、

夜もすがら水鶏よりけになくなくぞまきの戸口にたたきわびつる

(昨夜は、水鶏にもまして泣く泣く真木の戸口で、夜通し叩きあぐねたことだ。) ※夜もすがら……の歌Ⅱ 『新勅撰集』では道長の歌とする。

返し

ただならじとばかりたたく水鶏ゆゑあけてはいかにくやしからまし

(ただごとではあるまいと思われるほどに戸をたたく水鶏なのに、戸を開けては、どんな悔しい思いをしたことでしょう。あけⅡ(戸を)開け・(夜が)明けの掛詞)

作者への中傷と漢学の学識

※一条天皇に、『日本書紀』を読んでいることをほめられ、「日本紀の局」とあだ名がつく。

※本人は才能をひけらかすことを慎んでいるのに、悪意を持って言いふらした女房への怒りを記している。

※子どものころから弟よりも漢学の才能があり、父にも認められていた。

左衛門の内侍といふ人はべり。あやしうすすろによからず思ひけるも、え知りはべらぬ心うきしりうごとの、おほう聞こえはべりし。

うちの上の、源氏の物語、人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は、日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし」と、のたませけるを、ふと推しはかりに、「いみじうなむ才がる」と、殿上人などにいひちらして、日本紀の御局とぞついたりける。いとをかしくぞはべる。このふるさとの女の前にてだにつつみはべるものを、さる所にて、才さかし出ではべらむよ。

この式部の丞(Ⅱ弟・惟則)といふ人の、童にて書読みはべりしとき、聞きならひつつ、かの人はおそう読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞさどくはべりしかば、書に心入れたる親は、「口惜しう、男子にてもたらぬこそ幸なかりけれ」とぞ、つねになげかれはべりし。

清少納言批判

※清少納言の自らを誇る態度を批判している。

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、まな書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいとたらぬことおほかり。

【『源氏物語』五十四帖】

第一部

一、桐壺(きりつぼ)二、帚木(ははきぎ)三、空蟬(うつせみ)四、夕顔(ゆうがお)五、若紫(わかむらさき)六、末摘花(すえつむはな)七、紅葉賀(もみじのが)八、花宴(はなのえん)九、葵(あおい)十、賢木(さかき)十一、花散里(はなちるさと)十二、須磨(すま)十三、明石(あかし)十四、湊標(みおつくし)十五、蓬生(よもぎう)十六、関屋(せきや)十七、絵合(えあわせ)十八、松風(まつかぜ)十九、薄雲(うすぐも)二十、朝顔(あさがお)二十一、少女(おとめ)

《玉鬘十帖》二十二、玉鬘(たまかづら)二十三、初音(はつね)二十四、胡蝶(こちよう)二十五、螢(ほたる)二十六、常夏(とこなつ)二十七、篝火(かがりび)二十八、野分(のわき)二十九、行幸(みゆき)三十、藤袴(ふじばかま)三十一、真木柱(まきばしら)／三十二、梅枝(うめがえ)三十三、藤裏葉(ふじのうらば)

第二部

三十四、若菜上(わかなじょう)三十五、若菜下(わかなげ)三十六、柏木(かしわぎ)三十七、横笛(よこぶえ)三十八、鈴虫(すずむし)三十九、夕霧(ゆうぎり)四十、御法(みのり)四十一、幻(まぼろし)十雲隠(くもがくれ)

第三部

《竹河三帖》四十二、匂宮(におうのみや)四十三、紅梅(こうばい)四十四、竹河(たけかわ)

《宇治十帖》四十五、橋姫(はしひめ)四十六、椎本(しいがもと)四十七、総角(あげまき)四十八、早蕨(さわらび)四十九、宿木(やどりぎ)五十、東屋(あずまや)五十一、浮舟(うきふね)五十二、蜻蛉(かげろう)五十三、手習(てならい)五十四、夢浮橋(ゆめのうきはし)

【後世への影響】

和歌への影響

(例) 夕顔の花：『源氏物語』以前は和歌には詠まれない素材。

連歌への影響

連歌付合語に『源氏物語』に由来するものが多数。

能への影響

現存二三五曲中、『源氏物語』を典拠とするものは、十曲

「半蔀(はじとみ)」「夕顔と光源氏の恋(出会の場面)。(夕顔)

「夕顔(ゆうがお)」「夕顔のはかない運命。(夕顔)

「葵上(あおいのうえ)」「六条御息所が生霊になり、葵上の命を奪う。(葵)

「野宮(ののみや)」「六条御息所の悲しみ。(賢木)

「須磨源氏(すまげんじ)」「須磨の地で光源氏の霊が昔語りをする。(須磨・明石)

「住吉詣(すみよしもうて)」「光源氏と明石の君の住吉での再会と別れ。(湊標)

「玉鬘（たまかざら）」玉鬘の苦惱。（玉鬘）

「落葉（おちば）」落葉宮の夕霧への思慕。（夕霧）

「浮舟（うきふね）」薫、匂宮二人の貴公子に愛された浮舟の悲劇。（浮舟）

「源氏供養（げんじくよう）」『源氏物語』の供養により、紫式部を救う。

【絵画への影響】源氏絵

有名な場面が描かれる。

（例）桐壺…光源氏の元服場面。

帚木…雨夜の品定め。

空蝉…空蝉と軒端荻が碁を打っている場面。

若紫…雀の子が逃げてしまったのをなげく少女を光源氏が垣間見ている場面。

紅葉賀…光源氏と頭中将が青海波を舞う場面。

花宴…渡殿を歩く朧月夜の姿。

葵…六条御息所と葵上の車争いの場面。

朝顔…光源氏と紫の上が女童に雪まろばしをさせて眺めている場面。

若菜 上…猫をつないだ綱によって巻き上げられた簾の奥の女三宮の姿を、蹴鞠を

していた柏木が見る場面。

若菜 下…六条院の女楽の場面。

【文様への影響】

○扇と夕顔／牛車と夕顔Ⅱ夕顔

○籠と小雀Ⅱ若紫

○幔幕と太鼓、鳥兜Ⅱ紅葉賀

○黒木の鳥居と榊／牛車と秋草Ⅱ賢木

○橘とほととぎすⅡ花散里

【源氏香】

組香の一つ。五種の香をそれぞれ五包ずつ計二十五包作り、任意に五包を取り出して焚き、香の異同をかぎ分け、五本の縦線に横線を組み合わせた図で示すもの。図は五十二種あり、『源氏物語』五十四帖のうち、桐壺と夢浮橋を除く各帖の名がつけられている。後水尾天皇の時代に考案されたという。

絵画資料

① 源氏物語図屏風（若紫部分） 江戸時代

② 扇に夕顔文様繡箔（能装束） 江戸時代

『日本のデザイン』① 源氏物語』（紫紅社 二〇〇一年）より

源氏香之圖

* 桐壺

帶木

空蟬

夕顏

若紫

末摘花

紅葉賀

葵

花宴

賢木

花散里

須磨

明石

滯標

蓬生

閑屋

繪合

松風

薄雲

朝顏

乙女

玉鬢

初音

胡蝶

螢

常夏

篝火

野分

行幸

藤袴

真木柱

梅枝

藤裏景

若菜上

若菜下

柏木

横笛

鈴虫

夕霧

御法

幻

匂宮

紅梅

竹河

橋姬

榎本

總角

早蕨

宿木

東屋

浮舟

蜻蛉

手習

* 夢浮橋



